

北海道の日本海側、羽幌の沖合二五キロに小さい島が二つ。どちらも周囲一二キロ、面積五百ha前後、人口もいまでは六百人そこそこ。

陸地に近い方が焼尻、沖の島の島が天売である。私は焼尻に住んでいるが、鯨漁の盛んな頃からこの二つの島は夫婦島と呼ばれてきた。風俗、習慣、言葉、食べ物殆んどが相似た島であるが、現在の両島の自然環境は全く対蹠的である。

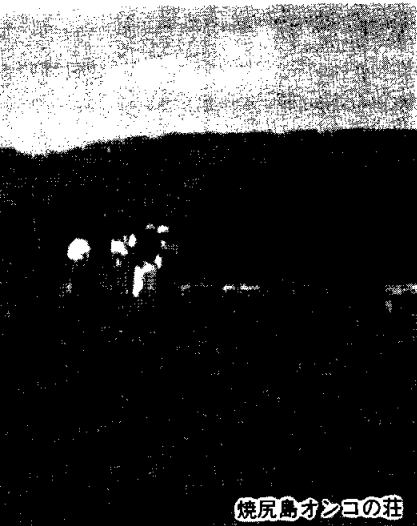
天売島はオロロンの島として知られているが島に樹影がない。ところが焼尻は、島の約四分の一に当たる一三〇haおよぶ、オンコを下層とし、ミズナラ、イタヤカエデなどの落葉広葉樹を上層とする天然生混交林がある。こんな小さな島にどうして、と思うばかりの自然林である。

弘化三年（一八四六）の松浦武四郎の再航蝦夷日誌に、天売については「……此島雑木多き由」焼尻の方は「平島樹木無し」とある。彼は実際に両島を踏査したわけではないからこの樹木に関する記述については疑問を抱かざるを得ない。あれから僅か一三〇年の間に焼尻のオンコやアカエゾマツの巨木が自生し繁茂したとは考えられない。

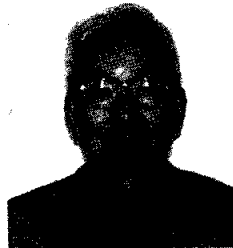
それよりも私は、「日本最初の英語教師」と言われるラナルド・マクドナルドの「日本回想記」の中の、彼が初めて踏んだ日本の地焼尻についての記録「……この島は小さな樹木とくさむら（名を知らない）」とトウの茂みにおおわれ……に興味を覚える。残念ながら彼は植物には詳しく無かったのか木の名は記していないが、彼の生誕地のコロンビア川の流域は今日でも針葉樹の大森林地帯である。そのような大木を見慣れた目には、初めて見る塩風に伸び悩む焼尻の樹木は小さい木と映ったのであろう。またトウと見たのは今も林の下層に自生しているハイ

# 焼尻島のオンコの林

## 磯野 利男



焼尻島オンコの荘



磯野利男（いその としお）

1914年和歌山県に生る。  
1932年中国東北部（旧満州）に渡り、34～41年満鉄に勤務。

47年より焼尻に移り、磯野旅館を経営し、現在にいたる。焼尻の植生に大きな関心あり。

イヌツゲではなからうか。

焼尻にしても天売にしても、人間が住むようになる二〇〇年までは島の殆んどが木で覆われており、さらに一万年も前から更新が繰返えされてきたと想像される。一五〇年くらい前から和人が住みつくようになってからは急激に変貌していくのである。

明治一二年戸長役場が置かれた時には、両島ともに和人とアイヌの人達合せて人口二百を数えていた。そしてこの時既に焼尻の西側地域の林は食料（ジャガ芋）の耕作と燃料用として伐り開かれていたと思われる。その面積は島の四分の三にも達していた。天売も同様であったであろう。

然し焼尻ではこの時点で林の木を伐ることを厳しく禁じた。燃料の薪は困難をおしてサンバ船（鯨積船。長さ九メートル巾二・五メートル）で羽幌から運んだ。後年三〇万本の植林も計画している。現在も残っているトドマツやカラマツの人工林はそれ以来昭和の初期まで続けられてきたものである。

焼尻には山の木を守ったという天狗の伝説がある。アイヌの人達から伝わったものとのことだが、天狗の出る民話は和人のもので、アイヌの人の民話や伝説には天狗の話はない。してみると伝えられている天狗の話は、鯨漁にやってきた和人の先立った人達の木を伐らさないための知恵だったのであろう。このようにして焼尻の天然林は守り伝えられてきた。

他方天売では、不漁の場合の食料確保のため耕作を奨励したという。現在の姿になったのもこのあたりから天売では焼尻の人達がきて天売の木を伐ったと言うのだが、やはりそこに住む人達の木に対する関心の差が異質とも思える島にしてしまったのである。その結果は「水」となってでている。天売の方は

地下水はおろか沢水も涸渇し水不足に悩まされてきた。今は五千屯のタンクを設置して融雪水や雨水を溜めて対応しているが、それでも観光ピーク時の断節水は免れない。それに較べ焼尻は水余りの島。簡易水道は地下からの湧水、余分の湧水は二千屯のタンクに貯水しておき夏に備える。林の中の二つの池の水は濁れることなく沢の流れも絶えない。

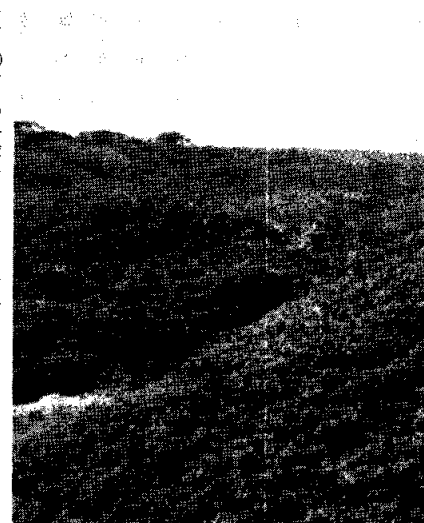
木と水、そして清浄な空気は人間の生活にとって必須のものである。二百年足らずの間に、焼尻と天売の木と水の差は全て人為的なものに起因していることを心に銘ずべきであろう。

私が焼尻に住むようになってから四〇年の間島の自然林を見詰めてきたが、島の樹木は、オンコは勿論他の広葉樹にしても、樹高は直に伸びず枝の折損、幹の心腐れも多く、北海道本道の森林に較べれば満身創痍で樹令も短い。それだけに島の自然林の保護維持については特別の配慮が必要である。

焼尻はオンコの島と言われるだけに自然林内に於けるオンコの生育密度は、平均一haに五九〇本ときわめて高く他に例を見ない。そのオンコの樹勢に驚が見えはじめたのが二拾数年前。然も後継稚苗は見当らず、自然発芽も年を追って減少しいまでは見られなくなった。島にとっては憂慮すべき状態である。

北海道立林業試験場でも調査することになった。

調査に当たられたのは「焼尻オンコの権威」齊藤新一郎氏である。調査結果を要約すると、原因としては①上木の繁茂による光不足②病虫獣害③雪害④幹の心腐れ⑤親株寿命などが挙げられ、保護対策については(一)現状の健全な維持として①現在の立木活性には上木の枝を伐透し、林内の光量の増加を計る②風道を閉じる防風柵をつくる③病虫獣の駆除など(二)次代森林のための対策として①苗木植栽②林床のサ



サ刈③防風林緑帯の造成など、を提言している。(昭和六一、一二)

また齊藤氏は別の調査報告で、現状では焼尻オンコの存続も危ぶまれると警告している。

苗木の植栽は十年前より羽幌町と焼尻自然保護対策協の手で林内に既に二五〇〇本植えられ、それなりの成果をあげている。

然し現存オンコの保護については何等の対策もなされていなければ、観光時期になるとこの自然林にレンタル・マイクローを乗り入れる。ウグイス谷やオンコの荘に至る遊歩道の入口に至る約五〇〇メートルの間だが、「入車禁止」の立札や「天然記念物焼尻自然林」の大標柱など全く無視して排気ガスを撒きちらし埃を捲きあげて走る。そのため枯死に瀕したオンコの老木も出ている。

さらにゲートポール場が出来てからは僅か五〇メートルの遊歩道にまで乗り入れる。この道は「幻想の径」といって永い年月と風雪が創造した、樹高の低い幻想を誘う樹形のミズナラやイタヤカエデが並ぶところで、ここ樹々は一度失えば再生を望むべくもない。町も地元も己むを得ないとして顧みようとしない。

海沿いの道路から放牧場を抜けて自然林に至る道があるのかかわらず。

来年度にも、岩寒別岳を含めた天売、焼尻が国定公園に昇格する。そして焼尻の自然林は第一種特別地域(特別保護地域に準ずるもの)に指定される。

さきの天然記念物の指定といい、現存するものの貴重価値が認められてのことである。にもかかわらず地元も自治体も口には保護を言うが、観光を優先し、現存立木の保護が等閑に付される。

物言わぬ樹木、入車禁止の立札、天然記念物の標柱、さらに水源涵養林、保健保安林などの標柱が建てられているがこの現状を何とみているであろうか。昭和三〇年(一九五五)より草地の西側に道による防風林造成事業が継続されているが未だに実が挙っていない(天売も同様)。ひとたび失ったものの覆元の難しさを如実に語っている。

焼尻の植種には北方系から南方系まであり、植生上興味ある島としてその道の専門家も注目している。花を例にとつても、亜高山系のイワツツジと、北海道では奥尻島だけに自生するとされている温帯系のヤブコウジが同居している。

小さな島で、花の種類はかなりあるがそれぞれの数は極めて少ないものもあり、消滅寸前のももある。それに追打をかけるのが土木工事である。島でも毎年一周道路の抜巾工事や沢の治水工事が施工されているが、この数年これらの工事のためにエゾフウロソウ、ネジバナ、エゾタンポポなどの島の稀少植物が潰えた。路傍ではもうその姿は見られない。

道でも町でも工事施工前に植生調査して稀少なものは移植するくらい配慮があつても然るべきであろう。一木一草をいとおしむ気持がなければ、建前だけでは自然は守れない。